

■第 20 回大会関連

日中社会学会第 20 回大会を終えて

東 美晴

(第 20 回大会実行委員・流通経済大学)

6月7日、8日、流通経済大学新松戸キャンパスに於いて、日中社会学会第20回大会を無事開催することができた。会員、非会員を含め40人を越える方々にお集まり頂き、実行委員として心から感謝する所である。

今大会では、7日は流通経済大学経済学部教授・原宗子先生による特別講演「中国歴代の社会変動と環境」に始まり、シンポジウム PART 1「現代中国の環境と人の移動」が行われた。8日には一般報告とミニシンポ「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」、シンポジウム PART 2「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性—個性と普遍のせめぎあいから」が行われた。主催者として、それぞれに興味深い報告と白熱した議論があり、お集まり頂いた方々に多かれ少なかれインパクトを残した二日間であったと信じている。

ところで、今大会にはシンポジウムのタイトルとしては直接、示されないメタテーマがあった。主催者として、シンポジウムを設定していく上で、ひそかに考えていたことである。それはすなわち、「中国とグローバル化する現代における移動」である。現代中国の環境変動や近代化プロジェクトに伴う環境の改変は、グローバルな市場経済に中国が参入していくことを背景に促進されるものであり、これによって中国国内での人の移動と階層の再編が促進されていく。また、過去から現在に至る越境は、地理的領域としての中国ではなく、仮想のネーションとしての中国を浮かび上がらせる。そこにおいて揺らぐアイデンティティも、「グローバル化と移動」の一つの問題である。そして、最後のシンポジウム PART 2は事務局提案のシンポジウムであるが、図らずもグローバル化状況下における中国研究のスタンスをめぐる議論となった。それはすなわち、中国に固有の文化性をよりグローバルに発信し認めさせていくことが社会学研究の欧米中心主義に対する重要な立場であるとするか、中国特殊論を越え、グローバルな現代社会の動向の中に中国社会を捉え研究していくことこそが必要であるとするかであった。

今大会が20回記念大会に相応しいものであったかどうかは参加者それぞれのご判断にゆだねるとして、中国研究に関して地域限定的な研究からグローバルな枠組みの中での研究を、という提案はできたと考えている。

日中社会学会が今後も若い研究者たちにとって報告・発表の機会を与えるものであるとともに、その研究をブラッシュアップしていく上で刺激的な場であり続けることを願う。また、来年度の名古屋大学における大会の成功を心から祈念して、大会主催者の総括としたい。

■大会参加記 [\(→大会プログラム\)](#)

第1日：6月7日(土)

開会式

会長挨拶：中村則弘（愛媛大学）

司会：首藤明和（兵庫教育大学）

松木孝文（名古屋大学）

中村則弘会長による開会挨拶では「若手の新しい活躍と参加を期待したい。小手先ではなく、どっしりと構えて研究に取り組んでほしい」と、20回記念大会開催に臨んでの将来への展望と期待が示された。多忙な毎日の中でもとすれば目先のことにとらわれがちとなる傾向があるが、そうした中でも長期的視野に立ち、真摯に研究へ取り組むことは決して忘れてはならないだろう。

特別講演「中国歴代の社会変動と環境」

講演：原 宗子（流通経済大学）

司会：根橋正一（流通経済大学）

松木孝文（名古屋大学）

20回大会のスタートを切る記念となる講演は流通経済大学の原宗子氏による「中国歴代の社会変動と環境」である。中国における社会変動がその根底のところでは環境変化（気候変動）によって引き起こされたという仮説は非常に大胆であるが、本報告はこの仮説を歴史的資料の精緻な分析により裏付けてゆく。これまでの研究においてはとすれば気候環境を永久不変なものと前提し、現代の環境を過去に当てはめて考えがちであった。それゆえに環境などは背景に過ぎなかったが、本報告においてはまずこの前提から問い直す。長い年月の中で気候環境は確実に変動しており、人類の歴史は確かにこの気候環境への適応の歴史として立ち顕れる側面を持つのである。

環境と社会変動の関係を示した本報告に対して会場からは主に「地球温暖化という新たな現代の局面にいかに対処するか」「ここ100年の近代による急激な変化にどう対処するか」という、現状への対応に関する質問が提出された。歴史を踏まえた上で今何ができるのか、というこれらの質問に対して、原氏は即効性の処方箋はないとしつつ、歴史を重ねて積み上げられた経験が現在に生かされていないことを指摘する。書物を読み解き、歴史に学び、それを生かすべく粘り強く世に伝えるという基礎的かつ地道な努力の継続がまさに求められるのである。

本報告において筆者は、長期的な歴史認識に立った分析の必要性、狭い専門分野での分析のみに固執・埋没してはならないことを再確認した。本報告はまさに開会の挨拶で述べられた「小手先ではない、どっしりとした」ものであり、新たなスタートとなる20回大会の記念公演にふさわしいものであろう。



シンポジウムPART 1

「現代中国の環境変動と人の移動」

司 会：浅野慎一（神戸大学）

報告者：包 智明（中央民族大学）

浜本篤史（名古屋市立大学）

根橋正一（流通経済大学）

コメンテーター：

西原和久（名古屋大学大学院）

東 美晴（流通経済大学）

長田洋司（早稲田大学）

第一日目 14:30 からは、「現代中国の環境変動と人の移動」と題してシンポジウムが開かれた。司会は神戸大学の浅野慎一先生、コメンテーターが名古屋大学の西原和久先生、流通経済大学の東先生で、3人の報告者の発表がなされた。

先ず、中央民族大学の包智明先生から、「中国内モンゴルにおける砂漠化と生態移民」という報告がなされた。居住地の生態環境の悪化に伴う他地域への移住である生態移民という問題について、広義・狭義の定義づけを示した後、「政府関与の有無」、「移住形式」、「移住後の生業」といった基準によって生態移民の様々なタイプを紹介した。次に、この生態移民という問題に関する先行的研究を紹介した上で、包先生ご自身が進められている内モンゴルでの調査について紹介がなされた。内モンゴルでは、砂漠化の進行に

伴う対策の一つとして、自治区全地域でこの生態移民の政策が実施されているという。そして、調査では政府部門から出されている文献資料や統計資料、さらに実際に生態移民が実施された9つの村での聞き取り調査とアンケート調査を中心としてまとめられ、今回の報告では、発表時間の都合から簡単な概要だけが説明された。

続いて、名古屋市立大学の浜本篤史先生より、「中国・山峡ダム開発と立ち退き移転者～山峡ダム住民移転はいかなる社会的文脈の下、遂行されようとしているのか～」という報告がなされた。報告では、山峡ダム開発にかかわる歴史、工事計画とそれに伴う大量の住民移転について説明がなされた後、その住民移転を進めるための政府による「開発型住民移転政策」の概要、その破綻と転換の現状について紹介がなされた。そして、そうした背景を踏まえ、住民移転に様々な問題が発生するにもかかわらず、「なぜ中国ではこのような巨大事業の遂行が可能であるのか」について、社会的側面との関連から検討することを目的として三峡ダムの事例を中心として報告がなされた。同事例は、移転がなされた後に問題が発生する「事後問題化型」として位置づけられ、豊かになりたい住民たちは移転を受け入れるものの、移転後に予想とは違う困難な生活環境に直面してしまう。しかし、噴出する住民の不満は中央政府には向かわず、地方政府に対して向けられているという。浜本先生はその原因について、成長イデオロギーの共有による現政権への信任と出稼ぎの日常化による住民の期待感と、中央政府が巧妙に責任を回避している社会構造によるものであると指摘した。

最後に、流通経済大学の根橋正和先生により「中国におけるレジャー空間の生産とエコツーリズム 雲南省香格里拉・碧塔海自然生態観光を事例として」という報告がなされた。報告は、「我々の最も身近な環境体験である観光が自然に対してかなりきつい圧力をかけている」という問題を出発点として、現在、中国が市場経済の中で観光産業振興を目指す中で注目している生態観光（エコツーリズム）について、開発の進む雲南省の事例から、「ツーリズム空間の生産」や「場所の消費」という視点で生態観光について考察することを目的とした。まず、ツーリズム空間そのものにかかわる生産と消費について、ルフェーブやアリーの理論を使いながら説明がなされた。次に、中国全体のエコツーリズムに関連した空間生産のあり方について、「風景名勝区」、「森林公園」、「自然保護区」という分類を紹介し、その上で新時代のレジャー空間、ツーリズム空間として生産されている雲南省の事例である碧塔海のエコツーリズムの形成について「物理的空間」、「思考された空間」、「生きられる空間」という三つの視点から説明がなされた。特に中国では市場経済社会および新たな産業として注目される中、このツーリズム空間が住民と自然にとって「生きられる空間」であるかどうかという視点から考察する必要があるとまとめた。

報告に続いて、コメンテーターからの意見が出された。まず、名古屋大学の西原先生からの包先生へのコメント。

・生態移民という言葉について日本ではまだ定着していないので、定義とともに この言葉の意味合いについて

- ・生態環境には社会環境も含まれるのか？
- ・ブラジルの移民、満蒙開拓団などは移民と言えるのか？
- ・政府の将来的な政策の欠如について

次に、浜本先生へのコメント。

・不満の実像について教えてほしい

・三峡ダムがグローバルな視点の中でどのように考えられるのか？

そして、根橋先生へのコメント。

・ J. アーリを用いる場合は移動の問題、定住型社会から移動型社会への転換という文脈での可能性について

続いて流通経済大学の東先生からの包先生へのコメント。

・自発的移民の範囲は広いのでは？

・強制的移民について、戸籍制度の問題があるのでは？

次に、浜本先生へのコメント。

・都市に移転される人は戸籍は変わるのか？

さらに、フロアからもいくつかのコメントが出された。まず、浜本先生へは、「国家主導開発モデルを維持できるメカニズムはどこにあるのか?」、「中央はよくて地方は悪いという考え方はアジア的カテゴリーで片付けられるか?」といったコメントが出された。次に、根橋先生へは、「香格拉の事例はエコツーリズムの事例としてちゃんとしていないのではないか?」、「エコツーリズムの実態に関して」といった質問が出された。

最後に、以上を踏まえて各報告者からコメントが出された。

まず、包先生。西原先生へは、「生態移民は日本でも使われている。」、「生態環境の悪化と社会環境の悪化は関連している。」、「政府の将来性の欠如の事例は多く、農業開発区の水不足の問題などがある。」、「国を超えた生態移民は政府のプロジェクトの範囲内ではない。」、「地方政府の役割は多いが、政府官僚の利益を代表し、住民を代表していない。」、「生態移民のプロジェクトは経済発展のプロジェクトになってしまう。」と各質問に丁寧に応答された。

次に、浜本先生。西原先生へは、「地方政府に訴える場合は問題化し、上級政府に訴える場合は地方への不満、お上へのすがるような態度である。」、「住民移転は国家プロジェクトで失敗は許されない。」、「民族の問題として捉えなくてもよいのではないか。」、「戸籍については、都市戸籍への転換の事例はある。」と回答した。そして、フロアへは、「経済優先を是正する転換は、開発経済成長を目指す触媒として働く。“和諧社会”“小康社会”など。」、「中央政府への批判に向かう可能性は潜在的にはある。」というように回答された。

最後に、根橋先生も、「移動と環境というテーマの中で、エコツーリズムは重要である。」など、一つ一つ丁寧に応答された。



第2日：6月8日（日）

一般自由報告

司 会：長田洋司（早稲田大学）

報告者：

松木孝文（名古屋大学大学院）

鄭 南（中部学院大学）・曹 陽（撫順社会科学院）

斎藤あつ子（早稲田大学大学院）

吳 偉明（香港中文大学）

宮内紀靖（瀋陽師範大学）

長田洋司（早稲田大学）

第二日目は、9時30分より一般自由報告が開かれた。5人の報告者による研究発表がなされた。

先ず、名古屋大学の松木先生から「日本の地方都市における中国人技術研修生・実習生—四国瀬戸内海沿岸地域の現地調査に基づいて」という報告がなされた。1993年より発足した外国人研修・技能実習制度で日本で労働に従事する中国人の増大を背景として、全国一律の制度の下にありながら、研修生制度にまつわる「良い話」と「悪い話」が混在する現象をどのように理解していくべきかについて、実際の調査事例を使って報告がなされた。調査は愛媛県および香川県の瀬戸内海沿岸地域を事例としており、報告では、

7ヵ所の協同組合での結果が紹介された。そして、受け入れ機関側の厳しい管理に伴う負の側面が強調されることによって「悪い話」が顕在化し、賃金以外の良好な待遇の側面が強調されることによって「良い話」が顕在化する可能性について指摘した。最後に、地域社会における外国人研修生・実習生の労働力以外の位置づけについて考える必要について示唆した。フロアからは、報告に出た「良い話」、「悪い話」が誰にとってのものであるのかといった質問が出された。

続いて、中部学院大学の鄭南先生が代表して「社区住民の生活と家族・親族ネットワーク—撫順市での住民調査を通して」という報告を行った。報告は、国有企業改革による大量の失業者が発生、未だ問題の多い社会保障改革、地方分権の進行に伴う地域格差の顕在化といった中国における社会背景を見ながら、「住民の生活状況はどのようになっているのか」、「階層的グループに属する住民の生活に影響を与える要因はどのように異なるか」、「社会的ネットワーク、とくに家族・親族間のつながりや援助が当人の生活にどのような影響を与えているのか」といった問題に関し、国有企業の集中する撫順市で行われた住民調査のデータを基に分析した。調査は確率比率抽出法によって選ばれた30の場所を対象に行われ、「生活満足度の規定要因」、「家族・親族ネットワークと互助」「家族・親族によるインフォーマル・サポートと単位・社区によるフォーマル・サポートの関係」、「フォーマル・サポート、インフォーマル・サポートと生活満足度の関係」といった項目に関して分析が行われた。そして最後にまとめとして、撫順では階層的地位の分化と意識の分化が大きくなっていること、大量に生み出されている失業者や不安定就業者たちにとって、インフォーマル・サポートがソーシャルキャピタルとして重要な意味をもつようになっていること、しかしその一方で、インフォーマル・サポートもコミュニティサポートも住民の生活度を高める要素にまではなっておらず限界があることなどについて指摘した。フロアからは、インフォーマル・サポートとフォーマル・サポートの補完性などについて質問が出された。

次に、早稲田大学の斎藤あつ子先生により「『廃都』に隠された国民国家誕生の思想—「me」としのオクシデンタリズム」という報告がなされた。報告では、文学作品を利用して社会変革（中国人の精神構造）を行おうとし、文学作品の中に自身が考える「me」という「一般化された他者」を描くことによって、その「一般化された他者」を読者と共有しようとする作家による中国の小説を題材としてなされた。そして、「一般化された他者」を「中国的人間の原型」として見る前に、その前提となっている「一般化された他者」を「西洋的人間の原型」としてみた場合に、作者が「一般化された他者」をどのように認識しているのかを示すことを目的とした。具体的には、1993年に北京で出版され、中国全土で空前のブームを巻き起こし、当局によって発禁処分となった『廃都』という小説を取り上げ、その中で展開される物語と『旧約聖書』を比較しながら、精神の病を基軸に、記号的分析を行った。そしてまとめとして、「知=力」であり、西洋のような力、西洋に対抗する力を獲得するために西洋に学ぶとするサイドのオクシデンタリズムに対して、「me」としてのオクシデンタリズムは「知=(積極的な)反省、自省」であり、中国の社会問題を解決するためには中国（東洋）の知だけでは足りず、自分たちの社会問題を改善するために西洋に学ぶことであると指摘した。フロアからは、物語の比較対象などについて質問が出された。

続いて、香港中文大学の吳偉明先生により「『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって—日本ホラー映画要素の香港化について」という報告がなされた。報告では、日本のホラー映画が、近年の香港ホラー映画に与えた衝撃を通して、文化のグローバル化におけるアジア映画の他国による共同制作、およびハイブリ

ッド化などの趨勢を考察し、その背景にある文化的意義について分析がなされた。特に日本のホラー映画が、香港をはじめとしたアジア地域において一大ブームを巻き起こしたきっかけは、「ザ・リング」であり、香港では1999年に香港映画史上で最高の売り上げを記録する日本映画となった。その後、この日本のホラー映画の撮影技術を含めた様々な要素が、香港のホラー映画において頻繁に模倣されるようになり、それは正に現地ホラー映画との融合という形をとっての現地化を果たしたという。

最後に、瀋陽師範学院の宮内紀靖先生から、「中国の2008年現在—国家社会主義と民主主義をめぐる諸問題【オリンピック関係】」という報告がなされた。報告では、北京オリンピック開催に関連して噴出している様々な問題に対して、中国の社会構造と構造を見るパースペクティブを提示することを目的とし、いくつかのキーワードに分けて、論じられた。まず、「社会主義的資本主義[社会主義市場経済]」については、最も早くに改良された資本主義の一例であるとし、政府は格差是正の調和社会論へと導こうとしているにもかかわらず、経済成長の持続と速度を重視して、格差是正と汚職撲滅は二の次となり社会不安を招いているため、この格差是正の努力により民主主義化に向かって社会主義社会構造を維持・強化が可能であるとする。また、「民主主義と自由」の項目では、エティック概念から見た西欧近代的な自然権としての抽象的な「自由」の観念とは異なるエミク概念からの「自由」の観念について説明し、この二つの自由の間の乖離を極力小さくして、西欧諸国の指摘にも謙虚に耳を傾けるべきだと論じた。フロアからは、エティックとエミクをどう関連付けるかといった質問が出された。

ミニシンポ「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」

コーディネーター：永野 武（松山大学）

報告者：

礪山 新（筑波大学）

「中国におけるエスニックネーションの起源」

南 誠（京都大学）

「中国帰国者」の歴史／社会形成」

松木孝文（名古屋大学）

2日目のミニシンポジウムにおいては最初に礪山新会員と南誠会員による基調報告が行われた。

礪山 新会員（筑波大学）

「中国におけるエスニックネーションの起源」

礪山会員による第一報告は「中国革命の父」とされる孫文が何故領域性を持つ「国家」という枠組みではなく「民族」を運動の理念として採用したのかを明らかにするものである。本報告においては孫文の海外留学の軌跡を追い、それぞれの場の歴史的背景とそこで培われた関係性などが孫文の思想を形成していく様がリアルに描かれた。そうして孫文らの「民族主義」が単に「漢族」のエスニックなアイデンティティに基づくものではなく、「中等社会」などの階層意識と絡まり合った結果であること、その前提がグローバルな人的移動等の社会変動により準備されたことが指摘された。本報告で示された、越境者を担い手とす

る国家枠組の形成は本シンポジウムにおける重要な論点の一つであろう。

南 誠会員（京都大学）

「中国帰国者」の歴史／社会形成

南会員による第二報告は、「中国帰国者」の歴史社会的形成を国民化、エスニシティ、コミュニティーの視点から論じるものである。本報告は国民を分かち様々な「境界」に着目しており、その変化とともに「中国帰国者」が変化を余儀なくされてきた様が描かれつつも、決してそれだけでは終わらない、定められた「境界」へ抵抗する彼等の力強さも指摘されている。一度形成された「境界」は単に制度だけではなく、現実を生きる人々の越境の試みにより絶えず揺れ動くのである。

本シンポジウムにおいては、様々な論点が提出されたが、とりわけ印象的だったのが、越境者であるがゆえに人々の持つ創造性と強かさについてであった。越境者は越境前・越境後のいずれの国にも還元され切らない新たな文化を形成する。そして越境者がそのことを自らのアイデンティティとして自覚したときには非常にアクティブな存在となり、新たな国家の枠組を形成する担い手になることさえある。本シンポジウムにおける議論においては、今日の社会変動を理解する上での越境者の重要性を再認識すると同時に、豊富な先行事例を歴史の中に求めることができることを強く印象付けられた。

シンポジウム PART 2

「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性——個性と普遍のせめぎあいから」

基調報告：王 向華（香港大学）

：中村則弘（愛媛大学）

討論者（五十音順）

東 美晴（流通経済大学）

石井健一（筑波大学）

呉 偉明（香港中文大学）

黒田由彦（名古屋大学）

陳 立行（日本福祉大学）

根橋正一（流通経済大学）

司 会：首藤明和（兵庫教育大学）

基調報告 1 王 向華氏（香港大学）

王氏の報告は西洋の東アジア研究が持つ限界を指摘するものである。従来の西洋発の東アジア研究は東アジアを西洋の思考のパターンに当てはめたものであり、東アジアをあるがままに理解することからは遠くかけ離れているという。氏は、様々の事例を挙げながら西洋の思考パターンにはまらない東アジアの独自性を呈示する。例えば西洋において対極にあると信じられる「友情」「計算」という二つの概念すら東アジアにおいては矛盾なく融合する。そうした東西の違いを指摘したうえで報告の末尾では「自分自身の西

洋のバイアスを自覚する」ことの重要性が指摘された。

基調報告 2 中村 則弘氏（愛媛大学）

続く第 2 報告の冒頭においては西洋の枠組みでは「割り切れない」東アジア社会のエピソードをひきつつ、第 1 報告で指摘された東アジア社会の特徴が再確認された。しかし同時に指摘されたのは東アジアで観察されるその種の「割り切れなさ」、あるいは「生き生きとした現実」は東アジアのみに留まらず西洋にもまた存在するという事実である。これまで信じられてきた西洋の姿は決して現実全てを表しておらず、むしろ豊かな現実を削ぎ落した理想像である。その理想像に引きずられるあまりに東アジアに対する認識だけではなく、西洋に対する認識をも誤らせてきたのである。東アジア的な思考様式を掘り起こすことは西洋を再認識する上でも欠かせない作業と言えよう。

報告後の討論では多くの論点が提出された。現実の認識に関わる点としては、西洋・東洋という括りの内部にも多様な社会が存在すること、すでに西洋においても現実を切り捨ててきたことへの反省が存在すること等が指摘された。東洋的な思考様式の必要性はすでに西洋でも認識されつつあるのだ。以上を共通理解とした上で次の課題が俎上にのぼる。すなわち、東洋的な思考様式を西洋の理解にも活用できる分析枠組みとする方法である。この点に関しても実践法から道徳論に至るまで活発な討論がなされたが、問題の大きさに対して時間はあまりにも限られており、具体的なイメージを形成するには至らなかった。しかし取り組むべき課題が豊富に示されたことは大きな収穫であろう。20 回の節目を迎えた本大会において東アジア研究の意義、および取り組むべき課題が真摯に問い直されたことは、日中社会学会の将来にとって重要な意味を持つに違いない。